診療室

動　物　医　療　の　ラ　ビ　リ　ン　ス

吉野信秀[†]（大分小動物病院院長・大分県獣医師会）

10年ほど前に開業獣医師である父のあとを継ぐべく，故郷の大分に戻ってきた．自分の得意分野がほしいと思い，全科診療をしながらも眼科にエネルギーを注いでいる．そのうち興味の対象が臨床に役立つ眼科の知識のみならず，動物の目に関すること全般に及んできた．特に他の動物がどのように世界を見ているのかを学ぶのは面白い．それが想像できたとしてもそれをどう感じているのかとなると想像もつかないが，環境に適応した進化に思いを馳せたりする．最近では物事を深く考える時にそのベースに進化論の影をちらほらと感じることがある．そんな状況なので，学会に出席するとどうしても眼科のセクションばかりはしごすることになる．自分の中で眼科とその他の分野の二極化がすすんでいることをまずいと思いながらもつい足が向いてしまう．

昨年私が所属する比較眼科学会で面白い企画があった．「網膜機能再生への挑戦」というタイトルで，網膜再生医療と人工網膜開発のそれぞれのトップランナーが現状を紹介するというものだった．

私はもともと工学部から獣医学部に転向した人間なので人工網膜の方にロマンを感じていた．もう20年以上前にテレビで，人工網膜を装着する手術を受けた盲目の人間が自由に歩き回るという映像を見て衝撃を受けたのが思い出された．しかし数年後その患者の後日談として，再会した愛しい娘の顔がたった1個のドットとして見えた時に手術を受けたことを実は後悔した，という手記を読んだ時には悲しい気持ちになった．しかし今やハイビジョンの時代である．飛躍的にピクセル数が増加したはずという期待を持って聴講したが，わずか数十個であったのには落胆した．160ピクセルあれば読書可能ということだったが，最低限人の笑顔を認識できるピクセル数は必要であろう．SF映画の世界にはまだ時間がかかりそうである．

それに対して網膜再生医療の講演には興奮を覚えた．iPS細胞から網膜シートをつくり網膜に移植するという世界初の試みが今年中にも実現するとのことである．演者の高橋政代先生はこの研究の第一人者であったと知ったのは実は最近で，握手しとけばよかったと少し後悔している．ともあれ移植手術が成功した暁には実際に患者の方にはどういう風に見えているのか興味がわく．我々も犬の網膜変性にはよく遭遇する．飼い主の方に治療法が無いことを伝えると涙を流されることもしばしばである．慰めにはならないかもしれないが，現在の網膜再生医療の現状を伝え，10年後には犬の網膜変性を治療できる時が来るかもしれないと伝えることにしている．

先端医療や高度医療に対する憧れを臨床医として持ちつつも獣医療の発展する方向に懐疑的な自分もいる．小動物医療は不思議な仕事である．なぜなら飼い主と動物の双方を満足させることが目的として，肝心の動物の気持ちや感覚世界は理解不能だからである．診療にあたって自分が飼い主ならどうするかと問いかける，そして自分が動物ならどうしてほしいかと考えてみる．しかし自分は所詮人間なのである．断脚手術を行った翌日は，自分であれば足を失ったショックで口もきけないだろうと思う．しかし彼らはまるで最初から3本足であったかのように元気にご飯を食べ，尻尾を振っている．そのこだわりの無さには尊敬の念を覚える．自分もそうありたいと思う．

飼い主の希望に沿うのが難しいケースもある．父の代からのお付き合いでもう90歳になる産婦人科医のおばあちゃんがいて，うちの病院では唯一往診を行っている．すぐに犬猫を拾ってきては可愛がり，たくさんの動物の世話を（主にお手伝いさんが）している．私はこのおばあちゃんが大好きだが難点が一つある．それは命の見切りが異常に早いという点だ．治療すればよくなる病気であっても，「先生，可哀想で見てられないから楽に

吉野信秀

—略　歴—

1999年　麻布大学卒業
同　　年　町田市 大室獣医科クリニック勤務
2002年　NY Animal medical center にて研修
2003年　大分小動物病院にて勤務
現在に至る

† 連絡責任者：吉野信秀（大分小動物病院）
〒870-0026　大分市金池町3-1-98　☎097-534-5576　FAX 097-535-9880　E-mail : nobu@oita-vet.com

してあげて.」ということがある．戦中戦後を生き抜いたこのおばあちゃんに対して，命を語る言葉を私は持たない．お願いして治療させてもらうこともあるがチャンスは一度きりである．そこにインフォームドコンセントは存在しない．

我々の仕事は満足させるべき対象が動物と飼い主の二者になるためどうしても軸がぶれやすい．しかもどちらに重点を置いても人間側の感覚である．人の医療に追随する形で発展を遂げる動物医療に対する一抹の違和感はその辺りから来ているのかもしれない．

時々立ち止まってはそんなことを考えながらも，学会発表に使えそうな症例に遭遇するとほくそ笑んだりする自分がいる．